

1. 題材名 「日本の民謡の音楽の特徴を感じ取って、その魅力を味わおう」

2. 教科・題材で提案する「やりくり」のたとえば

音楽活動の基本は、まっすぐな心を持って多様な音や音楽作品と対峙することである。

聴覚機能を通して伝えられる「音や音楽」の世界の意味を知るためには、受け手である私たちが、まずはひたむきに、真摯に耳を傾けることから始める必要がある。

その上で、音や音楽作品の美的側面（雰囲気・曲想・豊かさ・美しさなど）を感得することや、音楽を形づくっている諸要素（音色・リズム・速度・旋律・強弱・形式・拍の流れやフレーズ・和声を含む音と音とのかかわり合いなど）を感受するといった、活動へと進めることが必要である。

本校音楽科では、音楽の諸活動をする際の心の状態、ある目標にむかって取り組む中で、よりよい目標に向かって次にどうしたらいいのかを、すでに習得している知識や技能を用いて試行錯誤しながら取り組んでいる過程そのものが「やりくり」であるという定義で研究を行っており、近年は楽曲を鑑賞して気がついたことを表現へといかず(つなげる)学習を中心に研究に取り組んでいる。

～これまでの取り組みの概要～

平成25年度は、『「君もオペラ歌手」～“聴く”から“表現する”へ～』と題して、歌劇「アイダ」で歌われるアリアを聴き、ベルカント唱法で歌われる声の魅力を味わい、歌声を聴いて知覚したことをもとに、「どんな工夫をするとオペラ歌手のように歌えるだろう」という教師の問いかけを受けて、オペラ歌手の歌い方に近づくよう、実際に声を出しながら「真似る」や「工夫する」ことができた。

平成26年度は『「曲の魅力を伝えるには？」～歌曲「夏の思い出」を通して～』と題して、「歌詞の内容や作詞者の意図をくみ取って夏の思い出の魅力を伝えるためにどんな工夫をして歌えばいいだろう」というテーマのもと、楽譜を広げて、曲中のどこでどのような工夫をするかを具体的に考える活動(思考)を行い、その後実際に、“合唱”“合唱とビブラート”“演奏の仕方の記号”“フェルマータの長さ”“強弱”を工夫するグループなど、それぞれの活動の視点を1つに限定して歌ってみながら工夫していく活動との双方を行う授業を実践した。

平成27年度は、『「楽曲と向き合う」～「フーガト短調」を通して～』と題して、従来「同じ旋律が何回も繰り返されているね。確認のため最初から聴いてみよう。」と特徴をとらえる授業を教師主導で行っていたが、生徒に何も知らせずに鑑賞している状況の中、「この曲に引きつけられるのはどうしてだろう」と問いかけ、その間に対して、自分の考えを自分の言葉で他者に伝える活動に取り組んだ。この間に答える活動そのものの中に「やりくり」があると考えたからである。

平成28年度は、『「歌曲とは」～シューベルト作曲「魔王」を通して～』と題して、「魔王」のピアノの表現に焦点をあてて鑑賞することをきっかけとし、詩の内容や雰囲気を聞き手に伝えるためにシューベルトが楽曲の中でどのような工夫をしているのかを探究していく授業を構成した。本題材の鑑賞を通して、無意識のうちに音楽を形づくっている要素を手がかりとしながら思考判断し、自分が知覚・感受したことを、自分の言葉で根拠を持って他者に伝える活動に取り組んだ。活動の過程そのものが「やりくり」の連続である。

過去四年間、いずれも、教師の発問をきっかけとして、楽曲を音楽的に分析し、自然と要素や構造に触れる結果となったことである。

この「やりくり」をしながら学習課題に取り組む経験を繰り返し行うことが、さらなる学習意欲へと有効につながり、生徒が持っている力が伸び、音楽に向きあう姿勢に良い変化が現われ、より主体的な学習活動を発展させることができると考えており、より主体的な学習活動を繰り返し行っていくことで、思考したことを机上にとどめず、個々の表現活動につなげていけるよう取り

組んでいる。

本年度は、「日本の民謡の音楽の特徴を感じ取って、その魅力を味わおう」という題材で、民謡のリズムに着目し、「拍ののったリズム（八木節様式）」と「拍のない自由なリズム（追分様式）」の民謡を聴き比べ、特徴を感じ取る比較鑑賞を行った後、「八木節様式」と「追分様式」の特徴をつかみ、鑑賞して気がついたことを、実際に声に出して歌ってみる表現活動へといかし（つなげ）、日本の民謡にふさわしい発声により、言葉の特性を生かしながら表現を工夫して「ソーラン節」を歌う学習を行う。

（１）教師と教材

音楽科の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊か情操を養う」である。

本題材は、中学校学習指導要領では以下のように位置づけられている。

A 表現（１）イ 曲種に応じた発声により、言葉の特徴を生かして歌うこと。

（４）イ（イ）民謡、長唄などの我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるもの

B 鑑賞（１）ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

ウ 我が国や郷土の伝統的音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。

教師が発声の方法を教えるだけでなく、どのような音色、どのような身体の使い方等によって声の特徴が表現できるのか、生徒自らが気づくようにし、言葉の抑揚、アクセント、リズム、子音・母音の扱い、生徒自らがこれを生かして歌うための工夫をすることが大切である。

本校音楽科では「やりくり」の育成を通して、生徒が様々な音や音楽と対峙し、主体的にその音や音楽のよさや特質をとらえていく鑑賞活動のあり方と、鑑賞活動を通じて各自がとらえたことを、どのように表現活動に生かしていくかを研究しており、１時間単位の中で、どのような学習活動を中心として授業を構成し、どのように支援していけばよいのかを考えながら実践している。

本題材としている民謡「ソーラン節」は、北海道の民謡で、仕事歌である。仕事歌であることから、もともとは無伴奏の力強い歌であったが、やがて陸に上がって三味線の伴奏などで歌われるようになった。

北海道では、江戸時代から昭和初期にかけてニシン漁が盛んであり、ニシン漁の時に歌われる仕事歌はその作業によって「船こぎ音頭」「網越し音頭」「沖揚げ音頭」等が歌われるが、その中の沖揚げ音頭が「ソーラン節」である。網揚げは大変な作業なので、船頭は、ヤン衆（ヤンチャが訛った言葉）と呼ばれる東北地方からの出稼ぎ労働者たちを鼓舞するためや、重労働の気分転換のためにこの歌を歌ったといわれている。

「ソーラン」は「ソラソラ」という催促の言葉から転じたもので、「ハイハイ」はその答えである。昭和３８年に北海道の無形民俗文化財に指定されている。

（２）子どもと教師

本校は附属小学校出身者と公立小学校出身者の割合が半々であり、様々な小学校から入学しているので、生徒個々に小学校で学習してきた内容に違いがあることや、音楽の得意分野や不得意分野がある状況は、多くの中学校と同じである。同時に、入学後、新しい関係を築いていくことも大変である。入学して初めての授業を迎えた４月は、授業のオリエンテーションの後、校歌・応援歌の練習から始まり、その後全２時間のDVD鑑賞で、音楽は聴いている人に様々な感情を与え、

様々なイメージを描かせることを実感している。(これは毎年1年生の始めに実施している内容である。)

本年度は、授業に関するアンケートの実施や、アルトリコーダーの取り扱いや奏法についてなど、民謡を扱う前の授業実施時間数は7時間である。生徒同士の仲間作りは、日々の生活の営みや、4月の遠足、5月の船上山宿泊研修などの行事を通して進んでいるが、生徒と音楽科教員との関係づくりは、現在も進行中である。

(3) 子どもと教材

民謡を扱う授業の取りかかりとして、鳥取県の代表的な民謡「貝殻節」を鑑賞し、感じたことや気がついたことを意見交換する活動を設定した。その際、「貝殻節」の聴取経験を問うと、約三分の一の生徒は初めての聴取で、約三分の二の生徒は以前に聴取した経験があった。

小学校で民謡の授業を経験しているかどうか、学校間で違いがあるが、生徒は「民謡」をどのように捉えているのだろうかと思ったこともあり、日本の民謡の特徴を理解するところから授業を進めた。大きくは「仕事歌」「盆踊り歌」「座敷歌」「子守歌」という4つの民謡のタイプがあること、(もちろん、これ以外のタイプがあることは言うまでもない。)民謡の音階とその音階を元に作られている民謡の聴取、そして、民謡が生まれた背景となる文化・歴史などについて、教科書に掲載されている民謡の中から、他の生徒と重ならないように1つ選んで調べる活動を行った。

また、「ソーラン節」が生まれた背景や、労働の際に歌われていたのかについて事前に紹介しているが、歌と人の生き方・ありかたを感じたり、歌は人を元気づける効果があることを再認識させたい。

本時は、民謡の特徴的な歌い方「こぶし」に焦点を当て、日本の民謡にはなぜ「こぶし」があるのだろうかという発問も同時に行うことで、生徒自らが、「こぶし」の有用性に気づくことを期待したい。

3 題材の目標

- ・日本の民謡の特徴を理解することができる。
- ・民謡のリズムに着目し、「拍にのったリズム(八木節様式)」と「拍のない自由なりズム(追分様式)」の民謡を聴き比べ、特徴を感じ取ることができる。
- ・日本の民謡にふさわしい発声に気づき、表現方法を工夫して「ソーラン節」を歌うことができる。

4 学習計画(全5時間)

第1次 人々の暮らしから生まれた日本の民謡に親しみ、そのよさを味わおう。

第1時 日本の民謡の音楽の特徴をとらえ、そのよさや美しさを味わいながら聴き、民謡のタイプ、民謡の音階を知る。

第2時 各地の民謡について調べたことを発表し、それぞれの民謡の背景となる文化・歴史を知る。

第3時 民謡のリズムに着目し、「拍にのったリズム(八木節様式)」と「拍のない自由なりズム(追分様式)」の民謡を聴き比べ、特徴を感じ取る。

第4時 「ソーラン節」の生まれた背景について知り、「ソーラン節」を歌ってみる。

第2次 声や音楽の特徴を感じ取って歌おう。

第5時 日本の民謡にふさわしい発声により、言葉の特性を生かしながら表現を工夫して「ソーラン節」を歌う。(本時)

5 本時の学習

(1) 本時の目標 日本民謡にふさわしい発声により、言葉の特性を生かしながら表現を工夫して「ソーラン節」を歌う。

(2) 期待される生徒の様相

A・・・こぶしの表現方法を理解して、歌い方に気をつけて歌唱に取り組むことができる。

B・・・こぶしの特徴を感じ取り、歌い方に気をつけて歌唱に取り組むことができる。

C・・・こぶしの特徴を意識しながら、歌唱表現に取り組むことができる。

(3) 本時の展開

学習活動	留意点(・) 評価(※) デジタル教科書(☆)
<p>1 声に着目して「ソーラン節」を聴き、どんな歌い方をしているか、感じたことや気付いたことを意見交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声が震えている ・力強い 	<ul style="list-style-type: none"> ・CDの模範演奏をかけ、声に着目できるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">日本の民謡の声の特徴を感じ取って聴こう</div>	
<p>2 「こぶし」のある「ソーラン節」と、「こぶし」のない「ソーラン節」を聴き比べ、どこが違うか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こぶしがない→さみしい棒読みみたい ・こぶしがある→民謡の雰囲気が出る 勢いがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・CDの模範演奏と自分たちの歌を比較することで、どこが違うのか考えることができるようにする。 ※両者の違いについて感じ取り、言葉で表すことができる。【思考力】(ワークシート)
<p>3 「こぶし」はどんな歌い方か考え、具体的な歌い方を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・微妙に音程が変化している ・音が瞬間的に上がり下がりしている ・歌い手が即興的につける細かい音の動きこと(歌い手の腕の見せ所) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「こぶし」の方法について、自分たちで気づけるように促す。 ☆ある程度意見が出たところで、「こぶし」の動画(ニシン来たかと～の部分为例に)をクリックし、解説と模範演奏をかける。(約1分30秒)
<p>4 絵譜を見ながら、全体を歌い、その後、自分でつけやすい場所に「こぶし」をつけて歌ってみる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・こぶしをつける活動を取り組みやすくするために、自分のやりやすい場所(1～2カ所)で「こぶし」をつけるよう、指示する。 ☆生徒の状況を観察し、必要に応じてこぶしの解説をかける。 ※発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けて歌っている。【表現】
<p>5 「ソーラン節」の模範演奏を聴き、自分の歌唱と、模範演奏を聴き比べ、模範演奏をまねながら歌う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・絵譜を見ながら「ソーラン節」を聴き、微妙な旋律の動きを聴き取る。 ・微妙な音程の変化を目で見えて確認できるよう、プリントの絵譜を、指でなぞるよう助言する。
<p>6 本時の学習を振り返り、感想を書く。</p>	